

各狂言臺本の語彙における 計量的特性についての一考察

－ 「鬼の繼子」を例として－

張元哉*

目次

1. はじめに
 2. 調査資料と方法
 3. 各狂言台本における品詞構成
 4. 特化係数による各台本の特徴 語彙
 5. 品詞と文体
 6. 各狂言台本の分類と類似度
 6. 1 筋立てによる各台本の分類
 6. 2 語の使用率による各台本の類似度
 7. 今後の課題
-

1. はじめに

狂言台本は、室町・江戸初期の口語の様子を知る上で、欠かせない資料として重要な位置を占めている。また、狂言台本は、登場人物が多く身分関係も明白であることや、対話劇の形式で生き生きとした話し言葉が反映されていることなど、その価値が高い。

本稿は、大きくは当時の口語（の語彙構造の）の様子を、小さくは狂言台本が成立し、「筋書き・台本定着期」（16世紀半ば～17世紀半ば）を経て「台本固定・伝承期」（17世紀半ば～現代）にいたるまで、各流派（流派の不明も含めて）の語彙における相違点や類似点、それぞれの語彙の特徴を明らかにしていくための前段階のものとして一つの試み的な調査である。本稿で明らかにした結果（計量的な特性）は、今回一つの曲を調査対象としているゆえに、「鬼の繼子」という曲に限ってのことであって、「鬼類」や「狂言台本」の全体についての結果ではないことを断っておく。調査範囲を広

* 清州대학교 강사

げながら、各流派の狂言台本の語彙を弁別できる語彙の特徴を取捨選択しなければならない。

2. 調査資料と方法

本稿で調査対象とした狂言台本の曲名は「鬼の継子」である。「鬼の継子」を対象とした理由は、調査目的の条件として、1) 狂言台本における三つの流派すべてにその曲があること、2) 流派の不明の版本狂言記類にその曲があること、3) 狂言台本の言葉の変化を見るために同じ流派に二つ以上の台本がある¹⁾ことなど、三つの条件がそろった²⁾ものだからである。とはいっても、以上の三つの条件がそろっている曲が「鬼の継子」しかないというわけではない。本稿では、狂言台本における語彙の特性を明らかにする一つの試みとして三つの条件がそろった曲のひとつとして選んだわけである。今後ほかの曲も合わせて調査する必要がある。

「鬼の継子」の各流派の調査台本とその翻刻本と影印本は、以下のとおりである。

台本名	成立・書写年	流派	略称(以下、同)
虎明本	1642	大蔵流	虎明、AKIRA
天理本	1645前後	和泉流	天理、TENRI
続狂言記	1700	不明	続、ZOKU
保教本	1716-24	鷺流	保教、YASU
虎寛本	1792	大蔵流	虎寛、HIRO
三百番集本	1837-1853	和泉流	三百、SAM

虎明本：池田広司・北原保雄（1972-83）『大蔵虎明本 狂言集の研究 本文篇上・中・下』表現社

天理本：北原保雄・小林賢次（1991）『狂言六義全注』勉誠社

続狂言記：北原保雄・小林賢次（1985）『続狂言記の研究』勉誠社

保教本：天理図書館善本叢書（1984）『鷺流狂言伝書 保教本一～四』八木書店

虎寛本：笹野堅校訂（1942-45）『大蔵虎寛本能狂言 上・中・下』岩波文庫

三百番集本：野々村戒三・安藤常次郎校註（1938、1942）『狂言三百番集 上・下』富山房

1) 大蔵流と和泉流のみに限る。鷺流派は台本の種類や台本の曲数が少ないため、鷺流もこの条件に当てはめると調査対象の曲がかなり制限されるからである。

2) 三つの条件がそろっているかどうかの基準は、池田広司(1967)『古狂言台本の発達に関する書誌的研究』風間書房の曲目所在一覧によった。

調査方法としては、以下の手順や調査単位の規則にしたがう。

1. 六台本の全文を入力し、調査単위에 切る。
2. 調査単위는、文章의 構成要素를 把握するために文節單位に近い長い單位를 採用した。ただし、本調査では助詞・助動詞は調査対象外とした。以下に「天理」において女が登場する場面を例としてあげておく（/は、調査單位によって切られる部分である）。

女/出/て/これ/は/越中/の/国/あしくら/の/里/に/ぎょうぶ三郎/と/申/者/の/つま/にて/候/ぎょうぶ三郎/は/は/や/三年/先/に/往生/申/され/て/候/おや/のかた/なり/も/いろ/\ /みまへ/と/申/され/候へ/共/とかく/うちすぎ/まいら/ず/候/此/ほど/は/さい/\ /人/を/おこ/され/候/ほど/に/ぞい/所へ/まいら/ば/や/ト/思ひ/まいら/せ/候/二三/へん/まわり/て/やすむ/

3. ここで、注意しなければならないのは、「/ \」の繰返しの処理である。上の例からすると、「いろ / \」や「さい / \」は、1語なので切らないが、以下のような句や文を繰返す部分は調査対象としない。繰返しの部分を対象（数える）にすれば、繰返される部分の語が多くなり、その語の頻度が高くなるからである。六台本には、繰返しの部分が多い台本があるため、六台本の語彙を均等に扱うためにも、必要な処理である。

おにのままこそをのせて蓬萊の△△島へまいらふ △△△△△△△△△△△△

そのほかの処理としては次のとおりである。

- 以下のように「お-ある」の場合は、「死ぬ」と「お-あり」に分割し2語とする（「お-やる」も同様）。

「妾が連合ひはこそこの秋お死にあつたに依つて」→「死ぬ」、「お-あり」

- 各台本において該当語の表記形は異なっても、同じ読み（原本での）であれば同じ語としてまとめる。

「此他の者で御座る」→「あたり」

「是ははや毎（いつも）の野へ出ました」→「いつも」

- 同じ語でも品詞が異なる場合は、別語とする。

「いで喰はういで喰はう」→感動詞

「人もつれいでまいつて」→接続助詞

3. 各狂言臺本における品詞構成

以上の調査方法によって切られた調査單位の品詞は、国立国語研究所（1964）『国立国語研

究所資料6 分類語彙表』秀英出版 (p.4) に従った。ただし、これは厳密に言うと、品詞ではないが、ここでは便宜上「品詞」と呼ぶことにする。同書の品詞分類は、以下のとおりである。

- 体言類 (以下、体) 一名詞、代名詞
- 用言類 (以下、用) 一動詞
- 相言類 (以下、相) 一形容詞、形容動詞、連体詞、副詞
- その他の類 (以下、その他) 一接続詞、感動詞

各狂言台本を四つの品詞分類にまとめたのが表1 (延べ語数)・表2 (異なり語数) で、それを図にしたのが図1と図2である。表3と図3は、狂言台本の地の文と謡を除いた会話文のみの結果である。表や図における台本の順序は、「体」の比率の高いものから低いものへになっている。

	体	用	相	他	計		体	用	相	他	計
三百	338	245	138	40	761	三百	44.4	32.2	18.1	5.3	100.0
虎寛	236	189	94	47	566	虎寛	41.7	33.4	16.6	8.3	100.0
虎明	165	134	68	37	404	虎明	40.8	33.2	16.8	9.2	100.0
保教	112	105	61	13	291	保教	38.5	36.1	21.0	4.5	100.0
天理	192	221	80	11	504	天理	38.1	43.8	15.9	2.2	100.0
続	102	109	49	27	287	続	35.5	38.0	17.1	9.4	100.0
全体	1145	1003	490	175	2813	全体	40.7	35.7	17.4	6.2	100.0

表1 各狂言台本における品詞構成 (延べ語数)

	体	用	相	他	計		体	用	相	他	計
三百	157	100	75	18	350	三百	44.9	28.6	21.4	5.1	100.0
虎明	82	54	34	13	183	虎明	44.8	29.5	18.6	7.1	100.0
虎寛	92	53	50	13	208	虎寛	44.2	25.5	24.0	6.3	100.0
天理	83	71	43	4	201	天理	41.3	35.3	21.4	2.0	100.0
続	49	41	25	11	126	続	38.9	32.5	19.8	8.7	100.0
保教	60	51	37	7	155	保教	38.7	32.9	23.9	4.5	100.0
全体	523	370	264	66	1223	全体	42.8	30.3	21.6	5.4	100.0

表2 各狂言台本における品詞構成 (異なり語数)

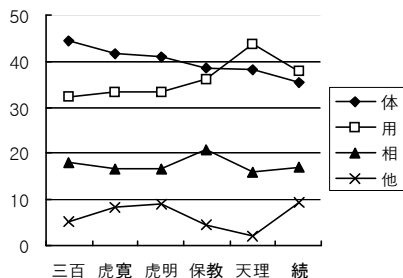


図1 各狂言台本における品詞構成(延べ語数)

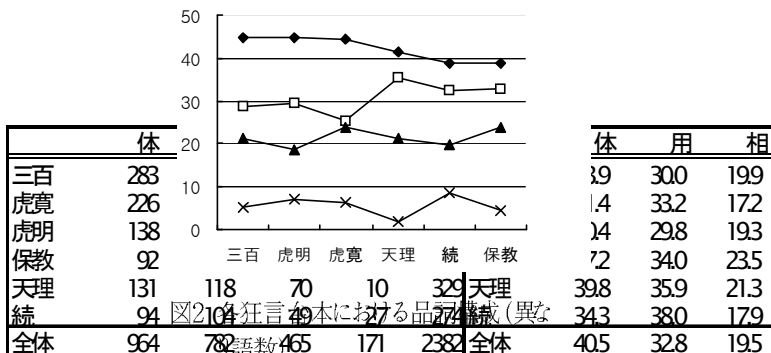


表3 各狂言台本の会話文における品詞構成 (延べ語数)

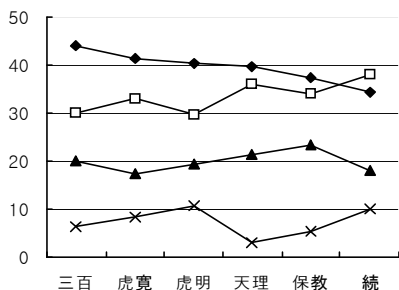


図3 各狂言台本の会話文における品詞構成(延べ語数)

以上の表と図から読み取れるのは、以下のとおりである。

1) 各狂言台本(表1)と会話文のみ(表3)の品詞構成は次のとおりである。また、狂言台本の品詞構成と比較するために『平家物語』の品詞構成比³⁾もあげておいた。

	体	用	相	他
①地の文+会話文+謡(表1)	40.7	35.7	17.4	6.2
②会話文のみ(表3)	40.5	32.8	19.5	7.2
③平家物語	61.7	33.4	12.5	1.3

まず、①と②の品詞構成比の比較においては、大きな相違は見られない。これは狂言台本における謡と地の文が、全体の品詞構成比に大きな影響を与えていないことであろう。ただ、用言類と相言類におい

3) 『平家物語』の品詞構成比は、白井(1974)の品詞調査を本稿の品詞分類にまとめなおしたものである(西田(1981)から再引用)。ただ、白井(1974)の品詞分類における連語・枕詞・その他(接頭辞、接尾辞か?)は除いて計算した。

での相違、②より①が用言類に多く相言類に少ないのは、以下の地の文からわかるように、(台詞の引用や動きの描写を表す動詞が多いからであろう。地の文の性格を端的に表しているといえよう。

おになればなをおそろしい事と云てふるう

次に②と③の比較においては、③より②のほうが体言類に少なく、相言類とその他類に多いことがわかる。これはおおよそ現代語の話し言葉と書き言葉の相違点⁴⁾と似通っているようである。これは、話し言葉と書き言葉の品詞構成の特徴や相違点が、時代が異なっても変わっていないことを意味するのかもしれないが、現段階の狂言台本の調査では、調査量が十分ではないことや、書き言葉の調査が本調査の調査単位と異なることなど、ただちに結論を出せない。ここでは大体の傾向をみることに意味をおく。

(2) 狂言台本の延べ語数(図1)では、「天理」の用言類が他の台本より異常に高いことが気が付く。異なり語数(図2)の「天理」においても用言の比率が高いことから、「天理」は用言の種類もその使用頻度も高いという特徴があると考えられる。ただ、図3の会話文においては「続」よりも「天理」の比率が低いことを考えると、地の文の何かが図1の比率を高くしていると思われる。それは、4節の特徴語彙の一覧からわかるように、「いふ」のせいであろう。53例のうち、47例が地の文にあるからである。「天理」の地の文に「いふ」が多い理由は、「天理」の台本の性格が注記的な書き方、つまり、狂言台本の成立の初期的な段階であるからであろう。

(3) 図3の会話文における名詞と動詞の比率を見ると、名詞の比率が低くなるにつれて、動詞の比率は高くなるのであるが、これらの比率と台本の関係は何らかの意味があるのだろうか。それをまとめると以下のとおりである。

名詞の比率	三百 > 虎寛 > 虎明 > 天理 > 保教 > 続
動詞の比率	三百 < 虎明 < 虎寛 < 天理 < 保教 < 続

以上のことからわかるのは、「虎明」と「天理」を除いて狂言台本の成立年が新しいものから古いものへの順になっている。「虎明」と「天理」が狂言台本の成立における初期段階のものであることを考えると、品詞と台本間において何らかの相関があるかもしれない。

4) 国立国語研究所(1955)『国立国語研究所報告8 談話語の実態』秀英出版によると、書き言葉に比べて日常談話は、以下のような特徴があるとされる(林大監修(1982)から再引用)。

1. 名詞が少ない。2. 名詞と動詞の比較において、動詞が多い。3. 動詞と形容詞の比較において、形容詞が多い。4. 副詞が多い。5. 感動詞が多い。6. 融合形が多い。7. コソアド語が多い。

4. 特化係数による各臺本の特徴語彙

各狂言台本に偏ってよく使われる語彙（用言）を特徴語彙と考える。偏りの度合いを特化係数で計る。特化係数は、「実測値の比率/期待値の比率」のように計算される。特化係数は語の頻度数に左右されるので、本稿では頻度数が5以上の語で四つ以上の台本に出現する語に限ることとする。

実測値と期待値は以下のように計算する。まず、期待値の比率(以下、期比)は、六台本に出現する総語数(2813語)を100%した場合、各狂言台本の語数(例えば、「三百」761語)の割合、27.1%である。実測値の比率(実比)は、六台本に出現する「あり」の総語数47例を100%とした場合、各狂言台本に出現する「あり」の語数(例えば、「三百」11語)の割合、23.4%である

語	合本	品詞	度数	実比	期比	特化係数
あり	虎寛	用	8	17.0	20.1	0.846829681
あり	虎明	用	4	8.5	14.4	0.591016548
あり	三百	用	11	23.4	27.1	0.866824271
あり	続	用	2	4.3	10.2	0.417188152
あり	天理	用	14	29.8	17.9	1.664091287
あり	保教	用	8	17.0	10.3	1.652551126

以上の方法によって、特化係数が2以上のものをすべて抜き出すと次のようになる。

語	台本	度数	出率	期率	特化係数
つる	虎寛	5	41.7%	20.1	2.07
いだく	虎明	3	30.0%	14.4	2.08
くふ	虎明	14	77.8%	14.4	5.40
おく	続	2	33.3%	10.2	3.27
おこす	続	3	42.9%	10.2	4.20
くださる	続	4	22.2%	10.2	2.18
くる	続	2	28.6%	10.2	2.80
こころう	続	2	22.2%	10.2	2.18
たすく	続	5	25.0%	10.2	2.45
のす	続	3	23.1%	10.2	2.26
みる	続	4	25.0%	10.2	2.45
やる	続	5	35.7%	10.2	3.50

いだく	天理	4	40.0%	17.9	2.23
いふ *	天理	53	52.0%	17.9	2.90
たつ	天理	3	50.0%	17.9	2.79
きく	保教	4	30.8%	10.3	2.99
くる	保教	2	28.6%	10.3	2.77
こころう	保教	2	22.2%	10.3	2.16
みる	保教	3	21.4%	10.3	2.08

* 「いふ」は、全用例数102例のうち「天理」に53例が現れるが、53例には地の文に47例、会話文に6例が出現する。

以上の語が各台本の特徴語であるが、そのうち、「くふ」「やる」については、もう少し詳しく見てみたい。

まず、「くふ」は「虎明」の特徴語として特化係数が5.40で、ほかの特徴語よりかなり高い。ほかの台本は「くふ」の意味としてどのような語を使っているかを調べてみると、以下のとおりである。

「くふ」の類義語	() 内の数字は頻度
かむ	三百 (3)、天理 (1)
くふ	虎明 (14)、続 (3)、天理 (1)
くらふ	虎寛 (10)、続 (4)、保教 (1)
のむ	虎寛 (1)
ふくす	三百 (2)、保教 (1)

「くふ」の意味として多くの類義語が各台本で使われているが、台本によって使っている語が異なることである。たとえば、「虎明」は「くふ」を、「虎寛」は「くらふ」を、「三百」は「かむ」を好んで使っている。これは各流派（台本）が意図的に他の流派と異なる特色を出すためかもしれない。もし、各台本にこのような特徴語があり、またこのような事実が明らかにされるならば、流派不明の台本を各流派に位置付けることも可能になるのであろう。

次に「やる」は、本動詞と補助動詞としての使い方が異なるが、用法においても台本（流派）によって異なっているようである。

「やる」における本動詞と補助動詞の使用頻度		数字はそれぞれ本動詞と補助動詞の頻度						
天理	0、1	三百	3、1	虎明	1.0 虎寛	1、1	続	1、4
保教	0、1							

5. 品詞と文體

各狂言台本の品詞構成については第3節で見たが、本節では、品詞構成から各狂言台本の文體を探ってみることにする。品詞構成から文體的特徴を判定する方法は、樺島忠夫・寿岳章子(1965)『文體の科学』綜芸舎で紹介されたもの、名詞の比率と「MVR」という数値を組み合わせた方法を利用する。

名詞の比率の増加は、話し言葉的な文章から書き言葉的な文章へ、感情の表現から事物の関係の表現に向かうという。一方「MVR」値は、以下のように計算されるが、

$$MVR = M(\text{相言類}) / V(\text{用言類}) * 100$$

MVRの値が大きい文章は、「ありさま描写的な文章(質、様子を述べる)」とし、MVRの値が小さい文章は「動き描写的な文章(行動、変化を述べる)」と判断する。

では、各狂言台本について文體的特徴をみることにする。表3を見てもらう。まず、名詞の比率についてであるが、一番高いものが「三百」(43.9%)で、一番低いものが「続」(34.3%)である。樺島(1979)では、文章の種類と品詞の比率が載っているが、名詞の比率が一番小さいのが「談話」(43.2%)で、一番高いのが「新聞見出し」(74.0%)である。このことから考えれば、各台本における名詞の比率は低いものとみなしてかまわない。次に、「MVR」値は、表3にあるが、表から分かるようにMVR値の開きが小さいので、はっきりしたことはいえませんが、MVR値が高いものが「三百」と「保教」で、低いものが「続」であることがわかる。つまり、

名詞の比率が小さく、MVR値がと高い：「三百」と「保教」→ありさま描写的文章

名詞の比率が小さく、MVR値が小さい：「続」→動き描写的文章

という傾向がなくはない。というよりも、「続」が他の台本よりその値が小さく、より動き描写的な表現をしているといったほうがよいかもしい。以下は、「続」と「三百」の表現の一例としてあげておいたが、「続」がより動き描写的な表現をしていることがわかる。

「続」

女 中、合点でござる 去ながら此子は何としませふ 鬼 其子はをれが養子に せふ
鬼 これへをこせ

「三百」

鬼 さて、重荷を持つたなあ どれどれ見せい 女 何と美しい子で御座らうが
鬼 これはどうやら甘さうなものぢや
女 なう、恐ろしや 大事の子を甘さうなといふ事があるもので御座るか

6. 各狂言臺本の分類と類似度

各狂言台本は、流派や時代によってそれぞれ異なった成立過程をへて、定着し固定されてきたが、これらの台本は、どの流派や時代によって、各台本の影響や台本の固定化への様子が、どの程度まで固定されたかによって、各台本の影響や台本の使用率から分類してみることにする。

6.1 筋立てによる

筋立てによる分類は、古川久他編（1976）『狂言辞典事項編』東京堂書店を基準にし、筋立てを16項目に分けて各台本の比較を行なった。16項目は以下のとおりである（本稿末の表4）。表4の16項目のデータに対して、階層的クラスター分析を行なった。図4はワード法によるものである⁵⁾。

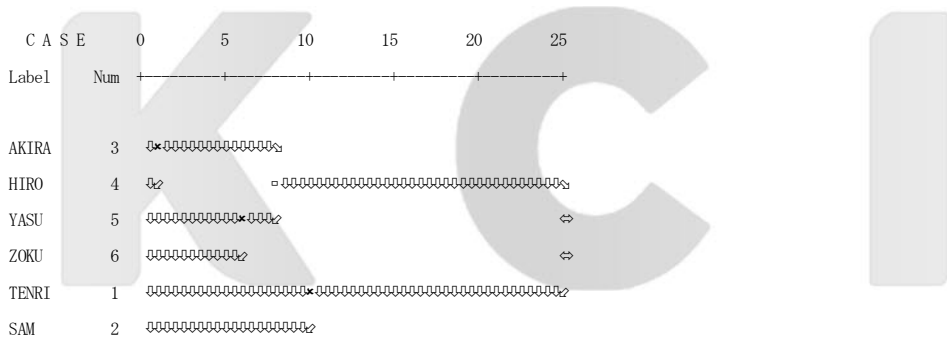


図4 各台本の筋立てによるクラスター分析

図4を見てわかるのは、まず、同じ流派である「虎明」と「虎寛」が一番近いことである。時代が遅い「虎寛」は「虎明」をそのまま踏襲していたことを表している。次に流派不明の「続」や鷺流の「保教」は大蔵流の台本に近く、少なからず影響を受けていることがわかる。一方、和泉流の「天理」と「三百」は、同じ流派でありながら他の台本間の近さより遠く、その他の台本とはかなり異なっている様子である。狂言台本を和泉流とその他の台本に大きく二つに分類することができよう。

6.2 語の使用率による各台本の類似度

⁵⁾ 統計ソフトは、SPSSを利用した。

各狂言台本に出現する単語の類似度を、「宮島の類似度」（宮島達夫（1970）「語いの類似度」『国語学』82）によって求めた。

$$CAB = \sum_i \min [Pi(A), Pi(B)]$$

類似度は、例えば、「続」(A)と「天理」(B)における単語の使用率を比べて、使用率が小さい方を合計するのである。以上の方法によって計算したのが以下のとおりである。

保教	0.372				
虎寛	0.441	0.394			
虎明	0.374	0.353	0.368		
三百	0.279	0.298	0.339	0.293	
天理	0.259	0.256	0.265	0.296	0.305
	続	保教	虎寛	虎明	三百

表5 各狂言台本の単語の使用率による類似度

各台本間における類似度が一番高い組み合わせは、「虎寛—続」(0.441)であり、一番低い組み合わせは、「天理—保教」(0.256)である。それから比較的に類似度が高い組み合わせは、「虎寛—保教」(0.394)「虎明—続」(0.374)「保教—続」(0.372)などがあり、比較的に類似度が低い組み合わせは、「天理—続」(0.259)「天理—虎寛」(0.265)などがある。

各台本間における単語の類似度を見てわかるように、おおむね筋立てによる台本の分類と似ている様子がうかがえる。

以上の二つの分析からわかるのは、流派不明の「続」や鷲流の「保教」は大蔵流に似ていて、和泉流と大きく二つに分けられることである。また、かなり新しく書写された「三百」は、筋立てでは和泉流の「天理」と似ているが、その台本で使われた単語は「虎寛」に近く、大蔵流の影響を少なからず受けていると考えられる。

7. 今後の課題

本稿は、いくつかの流派の狂言台本を資料に、いろいろな角度から各台本の計量的な特徴を探ってみたものである。これまであまり研究されていなかった分野であり、試み的な調査としてそれなりの意義を持っていると思われるが、課題も多い。

重要な課題としては、本稿で台本を一つの曲しか調査していないことがあげられよう。これまで述べてきた各台本の計量的特性というものを一つの曲の調査で、一般化するのは危ないからである。また、流派

不明の曲でも『続狂言記』だけではなく、『狂言記』や『狂言記拾遺』もあるので、これらも視野に入れて検討すべきであろう。今後いくつかの曲を対象に計量的な特徴とされるものを検証するとともに検討しなければならない。特に品詞構成比と台本間における関連性は、調査台本や調査方法に注意を払う必要がある。台本の成立年による品詞構成比の相違が認められるならば、語彙変化の一面が明らかにされるからである。

【参考文献】

- ・池田広司(1967)『古狂言台本の発達に関する書誌的研究』風間書房
- ・———・北原保雄(1972-83)『大蔵虎明本 狂言集の研究 本文篇上・中・下』表現社
- ・樺島忠夫(1979)『日本語のスタイルブック』大修館書店
- ・———・寿岳章子(1965)『文体の科学』綜芸舎
- ・北原保雄・小林賢次(1991)『狂言六義全注』勉誠社
- ・———(1985)『続狂言記の研究』勉誠社
- ・国立国語研究所(1964)『国立国語研究所資料6 分類語彙表』秀英出版
- ・———(1999)『国立国語研究所報告15 テレビ放送の語彙調査Ⅲ 計量的分析』
- ・笹野堅校訂(1942-45)『大蔵虎寛本能狂言 上・中・下』岩波文庫
- ・白井清子(1974)「軍記物語の語彙に関する一考察」『文学』42-12
- ・天理図書館善本叢書(1984)『驚流狂言伝書 保教本一〜四』八木書店
- ・西田直敏(1981)「軍記物語の語彙」『講座日本語の語彙第4巻 中世の語彙』明治書院
- ・野々村戒三・安藤常次郎校註(1938, 1942)『狂言三百番集上・下』
- ・林大監修(1982)『図説日本語』角川書店
- ・古川久他編(1976)『狂言辞典 事項編』東京堂書店
- ・宮島達夫(1970)「語いの類似度」『国語学』82

項目	筋立てのキーワード	天理	三百	虎明	虎寛	保教	続
1女が住むところ	越中の国、あしくら	○	○	×	×	×	×
	このあたり	×	×	○	○	○	○
2夫が死んだのはいつ	三年前、去年の秋	○	○	×	×	×	×
	なし	×	×	○	○	○	○
3親里に行く理由 食べる由	親からの要請	○	○	×	×	×	×
	(忙しくて当分行けなかったのに)	×	×	○	○	○	○
4夜道が怖い	一人でこわくて行きたくなかったのに	×	×	○	○	×	○
	なし	○	○	×	×	○	×
5鬼は人を食べるのか	人をたべない鬼＝嘔む	○	×	×	×	×	×
	人をたべる鬼	×	○	○	○	○	○
6鬼は女の 夫 知 合いか？	知っている	○	○	×	×	×	×
	ない	×	×	○	○	○	○
7地獄で夫の生活 を描写するか	あり	○	○	×	×	×	×
	なし	×	×	○	○	○	○
8女の子供について の描写	あり	×	×	○	○	○	×
	なし	○	○	×	×	×	○
9鬼が女に 要求する お願いは？	綻びを繕ってほしい	○	○	×	×	×	×
	妻になってほしい	×	×	○	○	○	○
10鬼が女にどのよう に脅すのか	嘔み殺す	○	×	×	×	×	×
	食べる	×	○	○	○	○	○
11行く途中女が身 掬えをするか 讒が 先に言うのか	女が身掬えをする (女が言い出す)	○	×	○	○	×	×
	女が身掬えをする (鬼が言い出す)	×	○	×	×	○	×
	なし	×	×	×	×	×	○
12鬼が子供をあや すか	あやす	○	×	×	×	×	×
	なし	×	○	○	○	○	○
13子供には 芸があ るか	芸がある(手打ち、かぶり)	×	○	×	○	×	×
	芸がない	○	×	○	×	○	○
14囃しをする理由	あやすために	×	○	×	×	○	×
	めでたいので	×	×	○	○	×	×
	なし	○	×	×	×	×	○
15鬼が子供また 食べようとする	あり	×	○	○	○	○	○
	なし	○	×	×	×	×	×
16退場の順序	女－鬼順	×	○	○	○	○	○
	鬼－女順	○	×	×	×	×	×

表4 各台本における筋立ての項目(キーワード)の有無

* ○と×はそれぞれ該当の筋立てやキーワードの有無を表す

要 旨

狂言台本が成立し、「台本定着期」(16世紀半ば～17世紀半ば)を経て「台本固定・伝承期」(17世紀半ば～現代)にいたるまで、各流派ごとに多くの台本が存在する。これらの台本は、流派によって異なる語彙を選択するなど、他の流派との差別化をはかっていたようである。また、各台本に使われている語彙が時代を反映していることもあり、語彙史の資料としても価値が高い。そこで、本稿は、狂言台本「鬼の継子」における各流派の六台本を対象に語彙調査を行ない、各台本の語彙の計量的な特性を考察したものである。各台本の語彙を「品詞構成」「特徴語彙」「文体」「類似度」の視点から分析を行った。その結果、各流派の台本を特徴付けることができる、いくつかの計量的特性が見られた。

キーワード；狂言臺本、「鬼の継子」、品詞、特徴語彙、文体、類似度、クラスター分析

투 고 : 2003. 5. 31

2차 심사 : 2003. 6. 11

3차 심사 : 2003. 7. 8

住 所: 360-090 충북 청주시 상당구 영운동 204 삼일아파트102-409

電 話: 043-257-9564

E-mail : chang_wonjae@hotmail.com

K C I